

1602年、塩沢宗閑翁は「世の人々の健康長寿に尽くそう」と願い、養命酒を創製しました。その100年後、古代の嚴州府(現在の杭州市建德市梅城鎮)では、塩東関の五加皮薬酒が誕生しました。蒸留酒と醸造酒を原料とし、五加皮、當歸などの薬草を配合して作られ、独特の味わいで疲労回復や身体強化の効果があります。

色はザクロの花のように鮮やか、
香りはシユンランより強し。

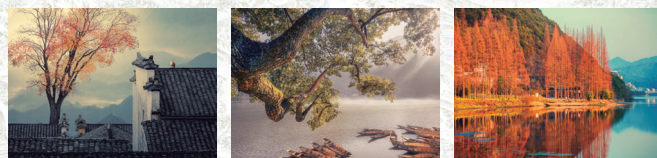
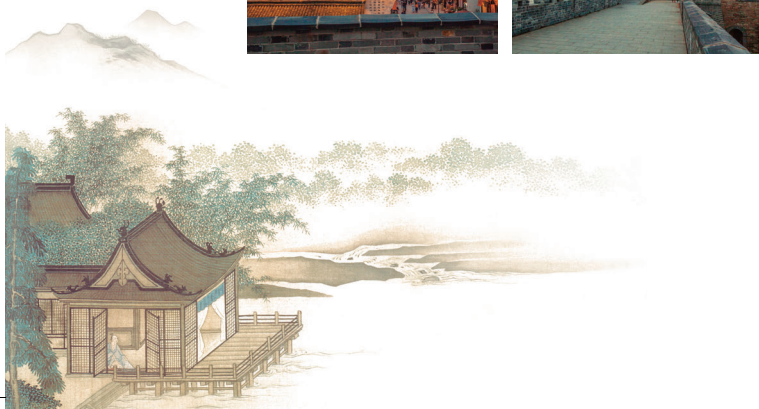
五加皮醸酒



江南の美しい景色を一望に収める 嚴州古城

ここは文化の街であり、南宋時代の「京畿三輔」という州府文化、「千車鱗鱗、百帆隠隠」(何千の車が鳴り響き、何百の帆がかすかに見える)という商業港の文化、そして「最高の詩と絵画は、天下で有名」という詩道文化があります。古くから嚴州は「四海の商人が集まり、何千の車と数百の帆で賑わう」街です。

繁栄した海運により、嚴州の軽食は呉越文化の集大成であり、嚴州古城では、「天下のすべての珍味を味わえる」と言われています。



時代を超えた詩に書かれた景色に出会う 新安江森林公園

ここは文化の街であり、南宋時代の「京畿三輔」という州府文化、「千車鱗鱗、百帆隠隠」(何千の車が鳴り響き、何百の帆がかすかに見える)という商業港の文化、そして「最高の詩と絵画は、天下で有名」という詩道文化があります。古くから嚴州は「四海の商人が集まり、何千の車と数百の帆で賑わう」街です。繁栄した海運により、嚴州の軽食は呉越文化の集大成であり、嚴州古城では、「天下のすべての珍味を味わえる」と言われています。



瑞安の老酒汗

春の景色は緑の川のように美しく、
陸放翁をも酔わせてしまう。

活字印刷は中国四大発明の一つで、日本でも安土桃山時代に広く使われていました。今日でも、沿岸の小さな町として、長崎の小値賀島や温州の瑞安には、世界でも数少ない伝統的な活字印刷技術が残っています。



職人の魂は、木活字印刷に反映されているだけでなく、瑞安の老酒汗にも隠されています。老酒汗は千年以上の歴史があり、その醸造技術は他の酒とは全く異なります。老酒汗は、黄酒を煎じる際に発生するアルコールガスを集めて得られるため、精巧な職人技で発酵状態の良い酒粕を処理してはじめて生産されます。

中国で唯一使用されている木活字印刷技術 瑞安の木活字印刷

瑞安の木活字印刷技術は、中国で保存され、現在も使用されている唯一の木活字印刷技術であり、活字印刷が中国発祥であることを示す最高の「実物証拠」です。木活版印刷は800年以上の歴史があり、世代から世代への継承と保護に依存しています。



玉のごとく、美酒を盛る 甌窯

考古学的発見によると、楠溪江の上流と下流、甌江下流の北岸、西渓流域など、多くの甌窯跡があり、川は澄んで曲がりくねっており、山は緑で翡翠のように広がっています。甌窯青磁はまさにこの地域のように、その翡翠の釉薬は非常に美しく、歴代の王朝の文人や詩人に詠まれ、高官や庶民にも広く愛されてきました。この容器で盛られた酒は、普段よりもまろやかになります。



詩と酒は 急げ

観光情報 / Vol.1





春未老、風細柳斜斜(春未だいず、風は細やかに柳は斜たり)。

試上超然台上看、半壕春水一城花
(試みに超然台の上に入りて看れば、
半壕の春水一城の花)。
煙雨暗千家(煙雨千家暗し)。

寒食後、酒醒却客嗟(寒食の後、
酒醒めて却て客嗟す)。

休对故人思故国、
且将新火试新茶
(故人に対して故国を思うを休めよ、
且らく新火を将て新茶を試みん)。
詩酒趁年華(詩酒もて年華を趁わん)。

これは、宋代の文豪である蘇軾が
千年前に書いた『望江南・超然台作』です。
この詩全体は情緒を風景で表現しており、
故郷への思いを寄せながらも、最後の「詩酒趁年華」は、
詩人の闊達で物事にこだわらない態度を存分に表現しています。

「举杯邀明月(杯を挙げて明月を邀え)を書いた李白や、
「扇にて酒くむかげや散る桜」を書いた松尾芭蕉から見ると、酒は、
中国と日本の文化において常に重要な役割を果たしてきました。
両国の過去の詩を読むと、
いつでもまろやかな香りを嗅ぐかのような感じがします。

一杯の酒には、
文豪たちのさまざまな想いや野望が込められており、
その地域の千年にわたる歴史と文化が
受け継がれています。

日本でもよく見られる紹興酒は、2000年以上の歴史があります。
「越酒行天下」(越酒は天下で人気あり)と言われる紹興酒は、
古代中国の文人墨客の魂に深く刻まれ、
紹興の風習をどこでも「観光客を酔わせる」
雰囲気になっています。

紹興酒
深い思いを語る
酒と詩で十分。



酒一壺で全軍を酔わせる 投醪河

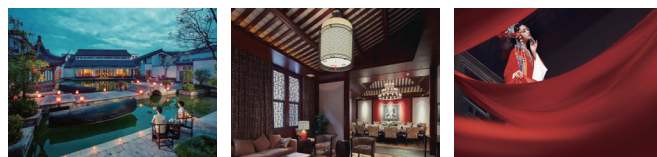
紹興市中興南路に沿って「稽山中学校」という学
校の南門まで歩くと、「投醪河」が見えてきます。紀
元前473年、越の王である勾踐は、呉を伐つため
にここから出発しました。越の民は、兵士たちを見
送るときに酒を持ってきて、勾踐は、兵士の士気を
上げるために、その酒を川に流しこませ、全軍で飲
むように命じました。

2000年以上前、越の人々は紹興酒を飲むことで、
「三千越甲可吞呉」(越の兵士はわずか3000人で
呉を征服した)という勢いを歴史に残りました。



春の夜に滴る真珠の赤 咸亨飯店

投醪河から北西に向かうと、紹興で最も有名な景勝地である魯迅旧居・沈園景区に
たどり着きます。咸亨飯店で新しく開けられた「女兒紅」は、それを楽しむ客をじっと
待っています。



澄みきって真白な月を映す 鑑湖

鑑湖は紹興の母なる川であり、数え切れ
ないほどの文人がここで踊ったり歌った
り、酒を飲んだりしてきました。

広々とした青い川は鏡のように静かで、壮大
な会稽山と調和しており、春と秋の時代
から数千年にわたって、ずっとこの街と紹
興酒を見守っています。



曲水の流觴、千古の勝 蘭亭

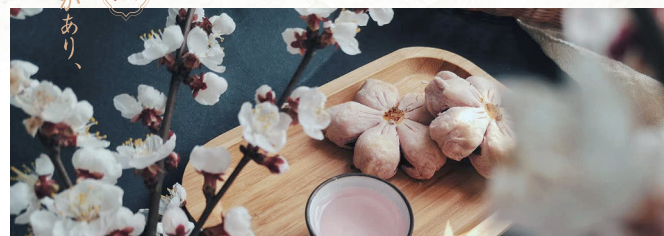
魏と晋の時代の話をすると、まず永和9年につ
いて話さなければなりません。

温かい春の日に、書聖である王羲之や他の
多くの文人墨客は、草が生え、鳥が飛び、
そよ風に吹かれる蘭亭溪のそばに集まり、
酒を飲みながら詩を詠んでいます。

そこで王羲之は、酔ったまま「蘭亭序」を書き、自分
の名を天下に轟かせました。今でも、蘭亭を歩いていると、
闊達でさっぱりした文豪の気質を実感できます。
紹興酒のおかげで、「天下一の行書」が達成され、
「蘭亭序」のおかげで、紹興酒も無限の時間と空間に
押し上げられています。



金華の醸造酒
ちようど金華の酒があり、
杯2つの楽しむ。



「随園食單」を読むと、魯迅の友人である
青木正児が最初に翻訳した訳本にも、
後ほど有名な学者である中山時子が再翻訳した訳本にも、
必ず「金華酒は澄んでいて渋みがなく、甘くて上品。
古いほど美味しく、それは、金華の水はどこまでも
澄んでいるからである」という内容があります。

その気迫は、江城十四州をも圧する 八咏楼

南朝時代に建てられた八咏楼は、1700年以上の歴史
を持ち、金華市のルーツである古子城内にあります。

西暦1135年、李清照は舟に乗って富春江を下り、何
度も八咏楼に登り、酒を飲みながら数々の有名な詩を
書きました。易安居士と呼ばれた彼女が今日の金華に
来て、婺江で舟に乗り、五峰で滝を眺め、鹿田で雨の
音を聞いたら、どのような詩を歌うのでしょうか？

一覧して衆山を小とすべし 東白山

偉大な詩人である李白と陸遊もまた、金華酒の
香りに魅了されていました。

東白山は、中国南部の鎮山とされており、この
美しい土地に刻印された巨大な印章のよう
です。雄大な風景、南東部の驚異として、東白山
のふもとにあるどの溪流や景色も、詩人のお気
に入ります。

百年古道の白峰嶺では、詩仙と呼ばれている
李白は、かつて「蘭陵美酒鬱金香 玉腕盛來琥珀光
(蘭陵の美味い酒は鬱金香のような芳香
を放ち、美しき杯に盛れば、琥珀色に光り輝く)
を歌いながらここを歩いたことがあります。

その300年後、
詩仙の後を追ってきた宋代の詩人である陸遊も、
特に金華酒を好み、
「石洞新釀」、「石洞餉酒」、「飲石洞酒戲作」など、
お酒を題名にした詩はいくつかもあります。

